



新潟県医療調整本部主催 新型コロナワクチン接種後の副反応を疑う症状
に対する相談・診療体制に係る説明会 (zoom による Web 会議)

2022/5/24 19 時から

「小児の新型コロナワクチンの接種の意義と ISRR について」

齋藤昭彦教授(新潟大学小児科学教室)

1. 小児は重症化しにくいですが・・・

頻度は低いが、重症例は確かに存在する。

- ・日本国内で 10 代の者が 8 名死亡、10 歳未満の者が 4 名死亡。
- ・米国で COVID-19 で亡くなった未成年者は 800 人超。
- ・多系統炎症性症候群(MIS-C)の存在。

※COVID-19 は、流行初期は小児の感染率は低く(1-2%)だったが、2022 年 1 月以降は、オミクロン株の流行に伴い、10 歳未満は 6.7%、10 代 6.3%が新規に感染した。

※オミクロン株でも、クループで死亡した例がある。

※肺炎、熱性けいれん、嘔吐・脱水で入院治療が必要となる症例もある。

※2 歳未満と基礎疾患(チアノーゼ性心疾患、免疫不全、高度肥満)のある小児は重症化しやすい。

※小児の感染数が増えるに従い、保育施設、学級、学校閉鎖の数が増加し、行動制限が多くなった。

2. オミクロン株に対するワクチンの効果について

- ・感染予防効果は、接種後 1-2 ヶ月で 20-30%である。
- ・重症化予防効果は、接種後 6 か月で 60-70%である。
- ・多系統炎症性症候群(MIS-C)の発症予防効果が認められている。
- ・5-11 歳のワクチンは、抗体を作る抗原量が、12 歳以上のワクチンの 1/3 である。
それで、副反応の頻度も少ない。親が体験した副反応ほど強い副反応はない。
- ・5-11 歳で、米国での報告では、心筋炎は 800 万回接種で 11 例あったが、全員回復した。

3. 予防接種ストレス関連反応(ISRR)について

(日本小児科学会 HP にパンフレット掲載)

予防接種に対する「不安」によるストレスが原因で起こる反応である。10代の女子に起こりやすいことが知られている。ISRR はワクチン接種直前の不安によっても起こることがある点、他の副反応と大きく異なる。

種類と出現時間

- ① 急性ストレス反応 : 交感神経が刺激されて起こる 接種前、中、直後(5分以内)
脈が速くなる、ドキドキする、息が切れる、呼吸が早くなる、喉が渇く、汗が出るなど。
- ② 血管迷走神経反射 : 副交感神経が刺激されて起こる 接種前、中、直後(5分以内)「たちくらみ」と同じ症状 脈が速く、血圧が低下、息切れ、早い呼吸、めまい、失神など。
- ③ 解離性神経症状反応 : 接種後しばらくしてから起こる(数日以降)

接種後しばらくしてから、力が入らない、手足が動かない(まひ)、不自然な手足の動きや姿勢、おかしい歩き方、しびれるなどの感覚の異常、言葉の障害、けいれんのような動きなど、説明のつかない(症状がばらばらである=解離している)神経に関係する症状が現れる。この病気でみられる手足のぴくぴくは「けいれん」のような動きは、脳からの刺激によって起こる病気(てんかん)とは違い、明らかな原因のない(脳からの指令のない)「心因性の非てんかん発作」と呼ばれている。その特徴として、気をそらすことで症状がなくなること、これまでの病気では説明が来ない色々な症状が出ること、薬を使ってもよくなること、症状は繰り返しながら変わることなどがあげられる。

患児への対応として重要なことは、「子どもの訴えを頭から否定せず、訴えをよく聞き、子どもに寄り添うことが大切である」。必要と認められた場合は、専門医療機関につなげる。

小児の新型コロナワクチンは、チャイルドシートにたとえられる。チャイルドシートは、自動車事故を防ぐことはできないが、万が一起こった事故に備えることができる。ワクチン接種を3回行うことにより、重症化を7割防ぐことが出来る、感染を5割減らすことが出来る。

(文責 五十嵐隆夫)